

H25 9.13.(金)中国新聞

発達障害と「聞く力」

講演要旨



広島市立広島特別支援学校教諭 竹内吉和さん

たけうち・よしかず 59年広島市佐伯区生まれ。広島大総合科学部卒。広島修道大学院法学研究科修士課程修了。02年から養護学校教諭、09年から現職。10年特別支援教育士スーパーバイザーの認定を受けた。7日に南区であった「母親クラブ」の研修会（市地域活動連絡協議会など主催）で講演した。

教育現場での経験を基に昨年、「発達障害と向き合う」（幻冬舎ルネッサンス新書）を出版した竹内吉和さん(53)が広島市安佐南区が南区で講演した。発達障害に対する周りの大人の理解を求め、中でも「聞く力」の弱さに対する優しさを力説した。要旨は次の通り。（有岡英俊）

人間は常に学習している。学習する力がすべての人に同じように与えられているのなら問題はない。現実には個々に違う。

学ぶ力は、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する、の六つに分類される。個性を形作る力でもある。中でも重要なのが「聞く力」だ。

発達障害の子は聞く力が弱いケースが多い。話す力も弱くなる。そういう子には優しく、ゆっくり、何度も語り掛ける。これが優しさであり、障害への知識や理解があつて初めてできる。

聞く力の正体は記憶だ。

繰り返し語る優しさを

聞いた内容を即座に覚える力や「聴覚的短期記憶」と呼ぶ。例えば、先生が「2時間目に運動会の練習をする。グラウンドに集合」と指示する。ところが児童4、5人が教室でうろうろしている。逆らっているわけではなく、理解できていないことが多い。

支援するには、黒板に書けばいい。聞く情報と異なり、書いた情報は確認できる。視覚での支援で聴覚的短期記憶を補充できるともや親が不安に陥らないようにすることが重要だ。子どもや親の話や聞きが有は健康を気遣う声掛けが有効だ。

聴覚的短期記憶の知識のない親はよく子どもを叱る。怒られ続けると子どもは10歳くらいで自我が芽生える。親や先生に怒られ続けると、どうせ自分は大めだとか、勉強ができないとか、自分を否定する。大事なものは早期の発見と対応。できれば10歳までに障害を発見したい。

発達障害の小中学生は現在、全国で6・5%、約70万人いるとされる。診断される。

発達障害の子は聞く力が弱いケースが多い。話す力も弱くなる。そういう子には優しく、ゆっくり、何度も語り掛ける。これが優しさであり、障害への知識や理解があつて初めてできる。